

# 仙台大豆作情報

令和8年度第1号  
令和8年6月3日発行  
仙台農業改良普及センター  
TEL 022-275-8410

## ◎栽培管理のポイント

- ① 排水対策 ② 土づくり ③ 施肥（基肥） ④ 適期播種 ⑤ 雑草防除（土壌処理）

### 1 排水対策

大豆は湿害に弱い作物です。湿害により根粒菌の着生が阻害される恐れもあるので、安定した収量を確保するために、排水対策を実施しましょう。

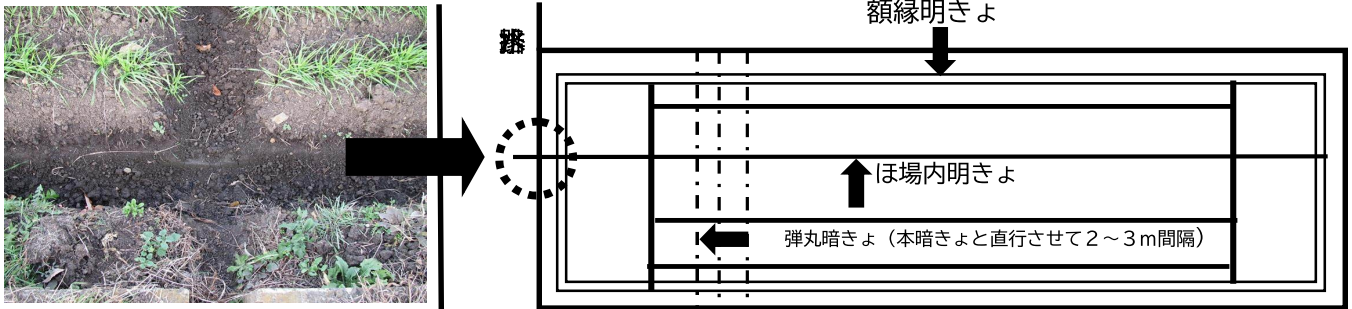
#### （1）額縁及びほ場内明きよの設置

明きよの幅及び深さは 20~30 cm 程度とし、畦畔に沿って額縁明きよを設けましょう。ほ場内明きよは、水口から水尻まで傾斜がない場合は間隔を 5 m 以内とします。

#### （2）明きよと排水路の接続

明きよは排水路と接続し、停滞水の排水を促します。降雨後などは特に、ほ場を見回り、明きよの崩れがないか確認しましょう。

★接続部分★



### 2 土づくり

#### （1）有機物の施用

堆肥などの有機物は土壌の物理性改善、微生物増殖などの働きのほか、根粒菌の着生・活動に良い効果を示します。牛ふん堆肥（窒素含有率 1% 程度）で 10a 当たり 1 t 以内を目安に散布しましょう。

#### （2）酸度矯正

水田土壌は pH 5.0~5.5 の酸性であることが多いので、pH 6.0~6.5 を目安に苦土石灰等の石灰資材を用いて酸度矯正を行いましょう。

#### （3）耕うん

砕土の良否は覆土の精度と種子への水分の供給に影響し、土塊が大きいと種子の過乾燥による出芽不良、播種深度のムラによる出芽の不揃い、除草剤の効果の低下につながります。砕土率（直径 2 cm 以下の土塊の比率）を 70% 以上になるようにしましょう。



図1 砕土率の異なるほ場表面  
(左:60%、右70%)

### 3 施肥（基肥）

根粒菌による窒素固定は発芽後2週間ぐらいから始まります。その間は施肥による窒素の供給が必要です。根粒菌は土壌中の窒素濃度が高いと着生が阻害されるので、基肥窒素は大豆の初期生育を確保できる量としましょう。

表1 標準基肥量（成分量 kg/10a）

栽培様式	窒素	リン酸	加里	備考
普通栽培 晩播栽培	1.5～2	5～6	6～8	<b>水田転作初年目のほ場または野菜作の後作で蔓化が懸念される</b> →無窒素とし、リン酸、加里のみ施用
晩播栽培(麦後)	2～3	6～9	8～12	麦稈をすき込む場合の成分量

### 4 適期播種

#### (1) 種子の消毒

種子伝染性病害である紫斑病や初期害虫の防除、鳥害忌避のため、種子消毒を行きましょう。特にタンレイは、紫斑病に弱い品種です。「クルーザーMAXX」などの薬剤で種子消毒を徹底しましょう。

#### (2) 播種

品種の特性に合わせて適期に播種します。作付面積が大きい法人や生産組織では、播種作業が梅雨時期に重なることもあります。種子消毒や播種機の点検など播種準備を計画的に行い、天気予報にも留意しつつ適期になったらすぐに播種できるようにしましょう。

表2 播種期・播種量の目安

品種名	栽培様式	播種期	播種量 (kg/10a)	播種様式	
				畦間 (cm)	株間 (cm)
タンレイ	普通播	5/下～6/上	4.3～4.5	75～80	20
	晩播	6/中～7/上	8.8	75	10
ミヤギシロメ	普通播	5/下～6/上	4.2～4.6	75～80	20～25
夕チナガハ	普通播		3.8～5.1	75～80	20～25
すずほのか	晩播	6/下～7/上	1.6～2.8	65～75	10～15
すずみのり	標播	5/下～6/上	3.6～4.8	75～80	20～25

#### ◎ ミヤギシロメの蔓化・倒伏対策

ミヤギシロメは分枝が横に広がるラケット型のため、蔓化・倒伏しやすい品種です。施肥量・栽植密度が多くなるに伴い蔓化・倒伏の程度が高まりますが、特に栽植密度に対する反応が大きいです。対策としては畦間・株間を基準通りにし栽植密度をあげないことがポイントです。

#### (3) 播種深

出芽に適した播種深は3～4cmです。浅すぎると鳥害の恐れがあり、反対に深すぎると出芽、苗立ち率が低下することがあります。また、発芽に必要な水分を保持するために、覆土はしっかりと行いましょう。

#### (4) 畝立て播種

畝の高さは10～20cm程度とします。畝間が通水路となり、地表面の排水を促します。

## 5 雑草防除

雑草防除の良否は収量に大きく影響し、コンバイン収穫時に**雑草が残っていると汚粒の原因**となります。このため、土壌処理剤と中耕培土、茎葉処理剤を組み合わせることで除草することが重要です。

### ◎土壌処理剤のポイント

- ・碎土不良では除草効果が劣るので、前述した碎土を丁寧にいきます。
- ・発生後の雑草には効果が期待できないため、**播種直後に散布し、なるべく播種後2～3日以内**に使用します。
- ・耕起・整地から播種までの期間が長くなると土壌が乾燥するため、除草剤が土壌表面に拡散されず、効果が低下したりムラが出ます。作業は計画的に行いましょう。

### ◎難防除雑草（アレチウリ・帰化アサガオ類）の防除対策（表3を参照）

- アレチウリ** 防除効果が比較的高い土壌処理剤に「フルミオ WDG」または「ダイロンゾル」があり、処理1か月後のアレチウリ残草量を無処理対比で数%～40%程度に抑制できます。
- 帰化アサガオ類** 播種前にトレファノサイド乳剤の全面土壌混和処理をすることで、出芽数と生育量の抑制に効果があります（宮城県「普及に移す技術」第99号）。また、「フルミオ WDG」の効果が比較的高いです。

**フルミオ WDG は、碎土率を高め、適度に土壌が湿っている条件で処理すると効果的です。**毎年発生が多い場合は、茎葉処理散布、中耕除草を組み合わせることで防除を実施しましょう。

表3 土壌処理剤について

薬剤	適用雑草	使用量 (散布液量)	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法
フルミオ WDG	一年生広葉雑草	5～10g/10a (100L/10a)	は種後出芽前 (雑草発生前)	1回	全面土壌 散布
ダイロンゾル	一年生雑草	150～200ml/10a (100L/10a)	は種後出芽前 (雑草発生前)	1回	土壌散布
トレファノ サイド乳剤	一年生雑草 (ツユクサ科、カヤツリグサ科、 キク科、アブラナ科を除く)	200～300ml/10a (100L/10a)	は種前	1回	全面土壌 混和

※記載した農薬は令和8年5月31日現在の内容です。使用する際は農薬ラベルで登録内容を確認してください。

### ■農薬危害防止運動実施中（令和8年6月1日から8月31日まで）

- ・ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分に確認しましょう。
- ・ラベルの注意事項にある「注意喚起マーク」の表示に従い、適切な保護具を着用しましょう。
- ・農薬使用の際に飛散防止対策を講じましょう。
- ・散布後には農薬の使用履歴を記帳しましょう。

### ■令和8年春の農作業安全確認運動実施中（令和8年3月1日から6月30日まで）

重点推進テーマ『徹底しよう！農業機械の転落・転倒防止』

- ・ほ場周辺の危険箇所の確認、危険回避行動の実践 ・危険箇所の改善
- ・シートベルトとヘルメットの着用 ・安全フレーム付きトラクターの利用